

雑誌『新若人』について

——付・「学徒は如何なるものを読む可きか」アンケート結果一覧——

中野 綾子

資料について

『新若人』は、佐藤卓己『言論統制—情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』（中央公論新社、2004）によって、その存在が広く知られた雑誌である。戦時下の言論統制の牽引者として知られる陸軍情報局情報官・鈴木庫三の日記の記述から、『新若人』が、鈴木庫三によって青年層向けメディアとして企画され、旺文社から創刊されたことが明らかになった。また、『新若人』の名は、太宰治「散華」の初出掲載雑誌としても知られている。太宰の他にも、これまで明らかにされていない文学者による作品を、紙面から数多く見つけることが出来る⁽¹⁾。こうした点から、『新若人』は、戦時下の青年向けメディアとして、そして太平洋戦争開始以降の文学作品の掲載誌として、重要な役割を担っていたと考えられる。しかし、戦時下の雑誌の中でも「散逸がはげしく、なかなか揃いが見られない」雑誌とされてきた⁽²⁾。

本稿では、早稲田大学図書館に新たに所蔵されることとなった、『新若人』創刊号（1940・9・1）から1944年5月号（6巻5号）までの、計57冊の刊行経緯や概要紹介に加え、『新若人』における学生の読書に関する記事を中心に解説していく。また、1巻5号に掲載された有識者に対するアンケート結果「学徒は如何なるものを読む可きか」をリスト化して掲載している。

『新若人』は創刊以来、月刊、菊判、五十銭で刊行が継続されている。発行は毎月1日、編集者は池田佐次馬である。出版元の欧文社（1942年から旺文社へ変更）は、1931年の創業以降、「第二の国家を担当すべき学生、青年層の助成と啓蒙的な仕事をやる事⁽³⁾」を目的とし、通信教育や受験雑誌、辞書、学習参考書の販売に力を入れてきた。なかでも、『受験旬報』（1941年に『蛍雪時代』と解題）への執筆依頼は、創業者である赤尾好夫と鈴木庫三の出会いのきっかけとなっている。創業者の赤尾は、どのような人物だったのだろうか。『新若人』刊行中の赤尾の評判を、当時の出版人を論じた『出版人の横顔』に探ってみよう。

出版新体制と共に業界の表面へ躍出した第一人者は、欧文社の赤尾さんと云へるでせう。（略）赤尾さんは山形県の人で、明治四十年の出生、即ち本年三十五歳であります。昭和六年東京外語卒業と同時に今の欧文社を創立して、出版界に

第一歩を踏み出されました。それから数へてもまだ足掛十一年にしかならぬのですが、同社の堅礎は既に数年前に成つてゐます。即ち創立四、五年目、三十歳そこそこで今日の龐大な富と業績とが成つたのでありまして、其の超人的躍進振は我が業界としまして博文館の初代大橋佐平翁と、小学館の初代相賀祥宏氏とに例を求め得るにすぎないのでありまして、其の覇業をヒットラーやムツソリーニに比しましても毫も不自然でないと考えられるのであります。(帆刈芳之助『出版人の横顔』出版亡命新聞社、1941・12・15、『出版書籍商人物事典』第一巻(金沢文圃閣、2010)所収)。

このように赤尾は、戦時下の出版界のなかで驚異的な躍進を遂げた人物であった。こうした躍進の一つの要素として、鈴木庫三による指導のもと刊行された『新若人』が果たした役割は大きい。戦後、旺文社が「戦犯出版社」として批判された原因も、そうした点にある。こうして『新若人』は、学生向けの通信教育から出発し、受験雑誌を刊行していた、旺文社の編集技術を活かすことで、中等学生、高等学校、大学生を対象にし、「積極的に社会意識を持たせ、国家本来の目的に進ませる」ことが目指されていった。

『新若人』には、口絵写真が掲載され、毎号座談会が開催され、時局と学生をめぐる様々な話題が提供されている。そのなかでも、学生の読書に関する問題は、『新若人』における一つの重要なトピックと言えよう。創刊から1943年頃までの紙面には、毎号読書関連記事が掲載され、読書に関する随筆や新刊紹介、作品紹介(古典文学、明治文学、海外文学など)が行われ、読書統計を用いた読書指導も行われている。

創刊号には、宇野浩二「文芸三昧」、谷崎潤一郎「文章読本」や「藤村詩集」を挙げながら、本を読むことのない学生を「不良学生」と批判する記事(織田正信「読書三昧」)が掲載され、3号の「読者通信」には、「全く先生の御説は、かねがね私等中学生の読書を白眼視する輩に一矢を報いた様な気がしました」といった好意的な声が寄せられている。1943年ごろまで毎号掲載されている口絵写真にも、「小閑を楽しむ戦線の皇軍勇士」と称し、「銀翼下に読書の秋を満喫する勇士」の写真が掲載されている(1巻2号)。そのなかでも、1巻5号(1941・1・1)は、「学徒の読書態度」(小笠原道生)や木村毅による「新若人の書架―新刊良書推薦―」、そしてアンケート「学徒は如何なるものを読む可きか」が掲載され、学生の読書の特集号のような様相を呈している。

このアンケート調査は、学徒(読者)に向けた著名人からの回答をまとめたもので、日中戦争下の学生層に対して、どのような読書がよいと考えられていたのか分

かる資料となっている。とくに、学徒出陣を機に『三田新聞』に掲載されたアンケート「戦陣に如何なる書を携行すべきか」(1943・11・25)⁽⁵⁾の回答者も数名含まれていることから、二年間の隔たりはあるものの、国内と戦場という場所において、学生層がどのような本を読むべきだと考えられていたのか比較を行うことが可能である。⁽⁶⁾また、評論家を中心とした三田新聞の回答者よりも、各大学や高専の教授など教育関係者が多いことを特徴とし、回答者数は八七名にのぼる。

回答の傾向としては、教科書を読み込むことが必要だとする考えが多く提出されている。次に、伝記を推す声が多く、さらに、ほとんどの回答者が具体的な書名ではなく、「古典」と回答していることが注目される。また、その「古典」の内容も、日本だけではなく、西洋や中国の「古典」が勧められている。こうした回答結果は教育関係者が多く、かつ大学生だけではなく、中等学校、高等学校の学生も読者対象であったことが関係していると考えられるが、個々の回答は、具体的な書名よりも、読書の方法や心構えなど、読書指導としての側面が強い。それは、1940年以降の新体制運動に伴い、学生の読書の見直しが行われることで、まず読書の方法論の改革が目指されたからだと言えよう。

同号から開始された木村毅による新刊推薦も、「図書館協会、茗溪会、近くは文部省、それから東京日々新聞で『良書推薦』」が行われていることに端を発しており、『新若人』におけるその後の読書関係記事の内容の変遷は、戦時下の学生の読書行為に対する状況の変化が映し出されている。木村毅、新居格による新刊推薦評⁽⁷⁾は、半年ほど継続されたが、その後、2巻4号にて、「書評は、従来のものと同じき方のかへて、なるべく部門別に良書の推薦をすること」に変更されている。また、部門別というだけではなく、「国家意識を離れた知識乃至教養はむしろ無きに如かずと云ふも過言ではあるまい」という編集後記の言葉が示しているように、新刊紹介においても、自由な図書の選択が難しくなっていく様子がうかがえる。そうした傾向をより鮮明にしたのが、2巻12号(1942・3・1)で行われた「戦時下学徒青年は何を読むべきか(座談会)⁽⁹⁾」である。日本出版文化協会の関係者や文部省教学局教学官などを迎えて行われた座談会では、抽象的な読書から、具体的な読書への移行が求められ、系統的な読書によって、「日本」に対する深い世界観を養うことが必要だと述べられている。また、ここでも具体的な書名はほとんど示されず、読書への態度や心構えが重要とされている。

さらに、4巻5号の「戦争と教育(座談会)⁽¹⁰⁾」でも、「大きく纏まつた書や原典⁽¹¹⁾」を読むことが少なく、「五年前十年前とちつとも変らない」読書傾向が指摘されている。そして、改善のために「系統的に、高等学校在学中に是非読まなければならん本はかういふ本である、その本を読むにはかういふ順序に読んだらいい」といっ

た「読書指導」が必要だと提案が行われている。

そうした提案を受け、翌月からは小沼洋夫による読書指針が連載を開始している⁽¹²⁾。座談会以降はとくに、西洋文化を無批判に受容する態度を非難する言説が増加し、「文化主義的な教養の概念を吹き飛ばし、真に日本人的な近代の教養及び国を憂へ人を愛する教養人を具体的に示してくれる」読書が必要だと述べられる。ここでは西洋ではなく、日本に基づいた「教養」への転換が目指されているのである。

また、4巻9号「教養と読書」（阿部仁三）では、「国家の級とするところに就き、身をもつて国民たるもの、生活のあるやうを体得すること、こゝに新なる教養が見出される」として、「教養」のあり方の転換が図られていく。そうした転換は、戦時下に読書を行う矛盾に対する回答でもあった。阿部は、「教養に進んでこそわれわれは安んじてこの時局下に読書することも出来、また書籍を書架にもどして軍務にもつき生産の増強に従つて些かの矛盾を感じずにすむのである」と語る。だが、こうした、「教養」の内実の転換が行われ、悪化する戦況のなかで、読書を行うための論理の合理化が進められながらも、『新若人』紙面には、読書に関する記事がほとんどみられなくなり、学徒兵の募集や戦意高揚的な記事が増加していくことになる。5巻3号の太宰治「散華」の掲載は、『新若人』が国策雑誌としての色を濃くした、そうした時期に当たり、今後は『新若人』という雑誌の変遷やメディアのあり方を考慮して論じる必要があるだろう⁽¹³⁾。

このように、『新若人』の学生の読書に関する記事からは、読書の方法や意味を少しずつ変化させることで、戦時下に読書を行うこと、それ自体の矛盾を解消するための言説が紡がれてきたことが明らかになる。『新若人』を、単なる「国策雑誌」として断じてしまうのではなく、いかなる力学によって、思想指導や統制が行われようとしていたのか、明らかにしていくことが求められよう。「読書」を視座として考察することは、そうした統制のあり方を明らかにすることに繋がるのである。

(1) 曾根博義「犬も歩けば 近代文学史量探索 (11) 雑誌『新若人』」(『日本古書通信』976号、2010・11)にて、いくつかの作品が列挙されている。総ての作品については、本号掲載の総目次を参照のこと。

(2) 注1に同じ。

(3) 帆刈芳之助『出版人の横顔』出版亡命新聞社、1941・12・15、『出版書籍商人物事典』第1巻(金沢文圃閣、2010)所収。

(4) 「シュルツェ氏を中心に 独逸の教育、学生、青年を語る」(座談会)(1巻1号)

ライホルト・シュルツェ(独逸青年団駐日代表)、長屋喜一(文部省教学局教学官)、鈴木庫三(陸軍省情報部)、赤尾好夫(6月10日夕、帝国ホテル)における座談会の赤尾の発言。

- (5) 中野綾子「学徒兵への読書推薦―「戦陣に如何なる書を携行すべきか」『三田新聞』アンケート一覧」(『リテラシー史研究』6号、2013・1)。
- (6) 同一回答者は、竹内時男、尾佐竹猛、吉満義彦、津村秀夫、清沢潤の五名である。
- (7) 1巻6号 木村毅「新春新刊評」/1巻7号 木村毅「春窓の文芸書」/2巻1号 新居格「『欧羅巴の七つの謎』その他」/2巻2号 新居格「ビリニヤークの『米国観』など」
- (8) 2巻4号 土岐善磨「新刊四種」、池田龜鑑「古典と学生」/2巻5号 竹内時男科「学書について」/2巻8号 菅井準一「科学と読書」/2巻9号 中村光「歴史の創造と歴史書」/2巻10号 藤田徳太郎「国文学書の傾向」。
- (9) 座談会参加者は、池島重信(日本出版文化協会雑誌課長)、来間恭(大日本赤誠会出版局長、評論家)、小山隆(文部省社会教育官兼教学官)、杉森孝二郎(第二早稲田高等学院院長)、中河与一(作家・評論家)、仁科芳雄(理化学研究所員理学博士、日本出版文化協会理事)、松本潤一郎(日本出版文化協会文化局長、東京帝国大学講師文学博士)、赤尾好夫、池田佐次馬。
- (10) 座談会参加者は、土田誠一(成蹊高等学校長)、津田栄(第一高等学校生徒主事)、西崎恵(文部省大学教育課長)、伏見猛弥(国民精神文化研究所員)、前田隆一(文部省教学官)、吉田淳(新若人編集部長)。
- (11) 参加者の吉田淳は、北海道帝大新聞での読書調査から、倉田百三「愛と認識の出発」「出家とその弟子」、西田幾多郎「善の研究」阿部次郎「三太郎の日記」、夏目漱石、ゲーテ、トルストイ、ドストエフスキイが読まれていることを指摘している。
- (12) 4巻6号「読書指針(1) 学生と読書の問題」、4巻7号「読書指針(2) 青年読書の目標」、4巻8号「読書指針(3) 哲学・思想書の問題」。
- (13) 李顯周「太宰治の「散華」論―三つの「死」の意味」(『文学研究論集』2002・3、筑波大学比較・理論学会)によって、『新若人』と「散華」の関係性が論じられているが、「国策雑誌」としての側面のみに焦点がおかれているため、『新若人』という雑誌メディアの果たした役割を含めて考慮する必要があると考えられる。

人 名	役 職	コメント
安岡正篤	金鶏学院理事 政治学者	一、古今の治乱興亡を説いた名著、偉人の伝記、遺著など耽読すべきです。一、信仰や哲学、科学の権威ある書を精読すべきです。一、外国の書籍、専攻外の趣味の書など閑に漫読するもよろし。
西村伊作	文化学院長	法科の学生は文学、特に小説を読み。工科は美術書を、理科は心理学的のものを、文化は科学及び工業の書を、医科は哲学、宗教の書を読み。学生時代には目の利益のための書よりも永遠的な人間性を知るために読書されたし。
秋澤修二	哲学者	これを読むべしと一々書名を挙げることは難しいが、要するに先づ新時代の理念の把握に役立つ出版物は一通り目を通すことが望ましい。常識的事柄なりとて徒に軽蔑すべからず。但し、学生として何よりも社会科学でも文学でもその古典を出来る限りみっちり読んでおくべきである云ふまでもない。
芦田均	衆議院議員	一、書籍は多けれど身につく書物は少し。学徒は先づ以て定評あるクラシックを読むべきだと思ふ。漢籍でも洋本でもよし。二、クラシックとは古い本との意味に非ず。出版されて直ちにクラシックになる本もある。例へばモロアの英国史の如し。モロアの英国史を読んで興奮しない青年は歴史の趣味を知らぬ者だらう。
小川未明	童話作家	戦線報告、帰還兵士の言葉、文学的ならざる従軍記、新興工業科学に属する書、今日の時代を認識して、憂国の精神をもつて書かれたる一般の政治、経済、文芸書等であります。

人 名	役 職	コメント
加藤重雄	陸軍省情報部	第一に教科書を読むこと。教科書一つ完全に読みこなせなくて、何の読書ぞや、です。それで余裕が出来たらなら、まづ科学、それから古典を勧めます。いずれも身につくほどに読書することが肝要。
大江精志郎	早稲田大学文学部講師	この重大なる時局に処して、青年学徒は先づ第一に確固たる世界観と信念とを保持すべきであると云ふ見地から読まべき書籍を二三挙げて見よう。天野貞祐著『道理への意志』 倉田百三著『日本主義文化宣言』『祖国への愛と認識』 大川周明著新訂『日本二千六百年史』 杉森孝次郎著『国際日本の自覚』 報徳文庫『二宮翁夜話』など。
竹内時男	東京工業大学助教授 理学博士	科学書と古人の伝記。近頃流行の新書は一寸待て。
阿部賢一	東京日日新聞副主事 経済学博士	第一に国史に親しむこと。これは国民のすべてがよく知らねばならぬことで、その上に専門の学問が生きてくること、思ふ。
下村宏	大日本体育協会会長 法学博士	私は今日日本及世界の将来につき執筆してます。内容の是非は批判をまつ外ありませんが、その目標は青年にあります。
坂田徳男	哲学者	力めて偉人の伝記を読む可きだと思ひます。政治家、思想家、科学者、芸術家の立派な伝記がもっと出版されることが必要だと考へます。現今は若い学徒に知識を詰め込むことに熱心であるが、インスピレーションを与へる点に甚だ不熱心でないでせうか。
木原通雄	政治社会評論家	文化科学、自然科学すべての領域に亘つて歴史を読んで欲しいと思ひます。そのみが、先人の残してくれた真実の遺産であるといふ意味において、又、新しい歴史を創る前提として、この際「歴史」への情熱のいやが上にも高からん事を望む次第です。
本村儀作	医学博士	一、精神修養、身体鍛錬に関するもの。伝記類は修養の眼を以て読めば古人に接するの感あつて興深し。如何なる書も読む人の心構によつて習得する方面内容が異なる。二、低級卑俗な小説を禁じ、科学的な材料を基礎としたものを読め。
廣井辰太郎	東洋大学予科長	私は亜米利加のエマソンと、英吉利のシェークスピアをして、日本語の局語、英語を以て私の言はんと欲する所を代弁せしめる。I "Never read any book which is not aye old. I never read any but famed books. I never read any but what you like" -Emerson "No profit goes where there is no pleasure ta'en: In brief, Sir, Study eh! you most affect." -Shakespeare
米窪満亮	社会問題研究家	「べからず」乱発の新体制組織下の政治、経済、文化、社会の凡ゆる機構に包括される今日の我々殊に感受性の特に鋭敏なる学徒諸君は間々その元気を萎縮する虞があります。従つて此際は大いに覇氣と野心と向上心を涵養する書物(例へますれば偉人伝英雄伝等)を読む必要があると思ひます。
津久井龍雄	政治評論家	一時の潮流にわづらはされず、一流の人物の一流の著書を体読すべし。
佐藤惣之助	詩人	各自専門の学以外には、古典ものです。新しい今日の視野からもう一度日本史を、ある重点をつくつて再読すべきでせう。莊園時代から維新史料、明治文化までを。
深作安文	文学博士	一、明治天皇御製集 一、芳賀矢一著『国民性十論』 一、論語
河合茂	広島高等師範学校教授	修養に資するものに限定すれば、日本のものとしては、畏れ多きことながら、明治天皇御製集、或は謹解したる書。支那のものとしては「四書」の内、殊に「論語」。西洋のものとしては「聖書」の内、殊に「四福音書」等読んで頂きたいものと存じます。
河竹繁俊	早稲田大学講師 演劇研究家	坪内逍遙著『通俗倫理談』石川武美著「わが愛する生活」右二著を推薦いたします。
飯田蛇笏	俳人	書海は甚だ汎い。その中で何れの方面の学徒に対しても源平盛衰記のやうなものは良いではないかと思ふ。少し深く行つて源氏時代とか俳文・謡曲或ひは又經典など専門的には推すことが出来るけれども、読み易い点と日本の性格を感じとる上で常識的にも推され得べきではないかと思ふ。
尾佐竹猛	明治文化史研究会々長	若い時代には何を読んでもそれが血となり肉となる。どんな本でも読むべし。他人に言はれて読むなんて事は青年学徒の恥辱なり。教科書は云はずとも読むべく彼はいふ必要なし。
八波則吉	第五高等学校名誉教授	教科書及び参考書類の外には、今次支那事変に関する戦争文学の愛読をお勧めします。出征軍人の書いたものに名文が多く、青年の士氣を昂揚するに足るものがあります。
百田宗治	俳人	一律に自然科学書に親しむことを推薦したい。何か一部門でよい。系統的に、共通に日本人に欠けてゐる資質をこれから吾々の手で補つて行かねばならぬ。此の問題に関して林蔵博士が「科学論議」で述べてゐる意見を正しいと思ふ。

人 名	役 職	コメン ト
由良哲次	東京高等師範学校教授	一、時局と字内の大勢に通ずる書を読まれたし。青年学徒の思想も自覚も実行も今はこれに基づかでは無意義に御座候。 二、修養書を読まれたし。青年学徒は、生活に固定する性格の略々出来上る時機なれば自己の人格、人物の修養の為、古今の修養書を読まれたし。古典のものに時代を超えたる趣味の書あり、現今にものまた現実の糧を与ふる良書ありと存候。 三、その上に自己の専門の書を研究せられたし。
吉満義彦	上智大学哲学科教授	少くとも千年以上を経たる人物の精神的古典を読む事を学べし。而して之を生産の読書目標とする様心掛けらるべし。
石井 倂	東京高等農林学校教授	各々専門の書物を充分読む事が必要であるが、余暇に偉人の自叙伝又は伝記を読む事。又、幸田露伴の努力論などもよいと思ふ。尚進化論に関するものを読む事もよい。手軽なものとしては紀行文、有名な小説も大いに読むべし。
山本一清	第三高等学校教授	学者は根本を究明すべし、学生は古典を読むべし。些々たる流行概念に傾く可らず。
、 額原退蔵	国文学者	「有用の書を読むべし」の一語に尽きる。有用とは自己をして国家有用の材たらしむるに資すべしことを意味する。近來翻訳物の流行と共に、之を手にする学徒を多く見受ける。勿論その中には所謂有用の書もあるには違ひないが、我々の先祖が日本語で書いた書物の中にはもつと有用な物が少くない事を忘れてはならない。
津村秀夫	映画批評家	和辻哲郎著「日本精神史研究」「倫理学」「風土」「古社巡礼」「古代文化」 寺田寅彦全集、阿部次郎著「地獄の征服」小宮豊隆著「夏目漱石」志賀直哉著「暗夜行路」柳田国男著「伝説」田口卯吉著「日本開花小史」(岩波文庫)、外国文学又はその訳書に就いては之を略す。漱石、鴎外の文学は論を俟たず。
清沢 洌	報知新聞論説委員 評論家	いゝ本がなくて困ります。読むべからざる物の中には所謂時局物があらうと思ふ。考へ方を片輪にします。僕は此の際は矢張り言論的な大部なクラシック的なもの英文ならば高い、がーを読んでそれを征服すべきだと思ふ。
法邑清蔵	山梨高等工業学校教授	(一) 神典(大蔵精神研究所発行)及び之に類する日本の古典(古事記、日本書紀、古語拾遺、祝詞)(二) 万葉集(抄本でもよい)(三) 日本道徳論(西村茂樹、岩波文庫)(四) 俳句(芭蕉、其の弟子のものなど)(五) 哲学(大島正徳氏著「哲学の話」など)(六) 科学概論(トムソンの「科学概論」など)(七) 日本歴史(八) 西洋歴史、(九) 東洋思想(四書、唐詩選など)(十) 宗教(聖書、歟異抄、臨濟録、碧巖錄、無門関、正法眼蔵等)(十一) 日本文学欧米文学の最有名なもの。
西田博太郎	桐生高等工業学校校長	一、学徒として一般的に考へる場合は、日本正史、本邦古来の勤王志士伝、大東亜共栄圏に関する情勢と我国との関係論文科学哲理、新体制を論ずる雑誌。 一、物質学問を学んで社会に出んとする学徒は右の外、発明家の苦心談、国家産業及経済、科学的事業管理法。 一、精神科学から進む学徒には以上の外、人生観、世界情勢、経済学の最新理論。
伊豆山善太郎	水戸高等学校教授	教養文庫の長与善朗氏著「日本文化の話」岩波新書の鈴木大拙博士著「禪と日本文化」等、推賞に値するものと思ひます。岩波発行の村岡典嗣博士著「日本文化史概説」も名著。少々高値だが日本評論社の「学生と日本」もいゝでせう。
中村一男	第二高等学校教授	教科書は勿論精読すべきであるが其他に一、新聞、外国電報、政治記事等に親しんで国の内外の動きを注視すべきである。二、雑誌、昔は学徒に適當なものがなくて無暗と高級が人は「中央公論」「改造」安易な娯楽を求める人は「キング」類に走つたが今は学生にあつらへ向きの健全な雑誌が出てゐる。三、古典、必ずしも古い物に限らぬ。長い間の自然淘汰に困り、傑作として今日尚生命のあるもの。
小寺融吉	評論家	万葉集を読むと上代日本人の生活感情がよく分り、日本人といふものが分る気がします。日本の文化は更に支那の文化の影響を蒙る事甚大ですから孔孟の古典も或る程度熟読玩味しておく事はこれからは特に必要と思ふ。
犬田 卯	小説家	何科によらずすべて原理を究める様なものを選んで読まべく、只それは相当に努力を要する事ではあるが敢然としてそれに肉迫せられたい。むづかしさに怖れて放棄する事なく最奥まで突入しそこから引返して此度は現象的のことを究めなければならぬと思ふ。
岡部長節	随筆家	古事記や万葉集の様な日本の古典。児童心理や青年心理を解説した心理学の通俗書。一応、遺伝の話に分らせる本。なるべく多くの人の紀行、探検記。主として大東亜の各地、奥地のもの、文学者、科学者、軍人商人等種々の人のを廣く心掛けて読む事。各国の歴史の概観。哲学では書物展望車発行の小倉清三郎氏著「思想の爆破」これは物を考へる根本原則だから誰でも哲学の予備知識なしに分る文章です。あとは各々専門の学問芸術の本、新聞、雑誌を読むべきです。

人 名	役 職	コメン
田中茂徳	前東京帝大教授 理学博士	今日坊間に発行せられる書物は汗牛充棟もたゞならず多数に上つてゐるが、誤やアヤフヤな真偽何れとも分らぬ事柄を多分に盛つたものも少くないから、どうしても老練な専門家の物した書物を熟読する事。多読、濫読すると兎角上滑りしていけない。いゝ書物を数回繰返して読まねばならぬ。
兼常清佐	音楽評論家 文学博士	此の頃科学といふ事が大変やかましくなつて來ました。科学知識を得る事は勿論必要ですが、然し聞きかぢりの程度では、餘り役に立たない。それで第一に教科書—科学、数学に関する—を熱心に読む事をすゝめる。いゝ数学、物理教科書をよく知つてゐればそれは相当なものです。先づこれだけの常識を得たいです。
小野賢一郎	日本放送協会文芸部長	今小学校用の教科書を読んで何々博士の著書より大きい教へど驚きを受けることがあります。中等学校の本も同様です「拝付けられた本」と思はず「授かつた本」として耽読味読すべきではありませんまいか。
高島米峰	社会評論家	日本の学徒は総じて先づ日本の事を知らねばなりません。そこで古事記と日本書紀とを精読することが最も要です。
伊福部敬子	婦人問題研究家	文化的に文化発展のあとを知り、歴史的に日本の做ふべきところを知るために、ヴァン・ルーシ「世界文明史物語」コフマン「人類文化史」和辻哲郎「風土」大川周明「大日本二千六百年史」等読むべきです。
井伊重夫	文化批評家	一、日本の古典 二、日本の歴史 三、外国の古典的名著、注釈書に頼らず原典を少しでもいゝから読む事 四、新聞広告の推賞よりも歴史が選択してくれた古典こそ信頼に足るものである。
土井晩翠	詩人 第二高等学校教授	俗に媚びず、権に阿らず、真心から敬天愛人の大道を説く書を読むがよい。
浦本政三郎	東京慈恵会医科大学教授 医学博士	一、務めて自然科学のよき本に接し、その親方を生活に取入れるを要す。二、歴史を読むべし。但し専門家よりも却つて大川周明氏の諸著の如き生命の匂ひのみなきるものを推奨す。三、如何なる著書も著者と一問一答するつもりで読めば自ら得る処あらむ。
岡本成蹊	翻訳家	自分で整理統合する事が出来れば、時に乱読であつても支障ないと思ふ。定評ある権威あるもの、古典的価値あるものを選ぶことが必要。無意味な所謂流行のものなどは追はない事。然し世界の動き、国家の動向等に関する時局的なものには出来るだけ接する事、中学生諸君は特に日本歴史、世界歴史に関するもの、入門的な教科書、古典及び古典的文章を読むことを薦めたい。
芳賀檀	法政大学予科教授 評論家	ヘーゲルのデアレクテイクより寧ろニイチェの生の意志を。「学」よりも「観智」を。
大森洪太	法律家	何よりもまず古典。
石丸梧平	思想研究家	学生は学ぶことが仕事であるにも拘らず学校のノートは止むなくやるが、本当に学ぶ事に怠る者が可なり多い。新体制は単なる流行ではない。しつかりと体得すべきである古典を学ぶことは素より大切である。だが今こそは古典を生かすべき時。古典が古典で終つたのでは学問の意味はない。
石濱知行	読売新聞論説委員 社会経済評論家	支那について青年諸君にとり理解し易い良書として「支那の経済機構」(岩波)の一読をすゝめます。
中河與一	小説家	評論ではヒトラー著「わが闘争」藤澤親雄著「日本学理念」ローゼンベルグ著「二十世紀の神話」保田與重郎著「英雄と詩人」小説では、アンデルセン著「アンデルセン童話集」ゲーテ著「若きヴェルテルの悩み」中河與一著「天の夕顔」
松原寛	日本大学教授文学博士	一口に学徒と言つてもそれらの年配と進まんとする方向によつて違ふ譯ですが、凡ての学徒に読んで貰ひたいのは我が国の歴史に関する本であります。
今田竹千代	早稲田大学教授	田邊元著「科学概論」中村清二著「自然と数理」石原純著「自然科学の世界像」M.N.Planché:Wege Zur Physikalischen Erkenntnis. A.N.Whitehead:Science and the Modern World. 理科の学生は勿論、文科の学生も是非読んで欲しい。選択理由—真の日本精神は科学的文力の上に表現せらるべきもの、それは単なるお題目であつてはならぬ。
安藤一郎	米澤高等工業学校助教授	大川周明「大日本二千六百年史」エーヴ・キュリー著「キュリー夫人伝」ブライス著「日の出の予達」長興善郎著「日本文化の話」柳田謙十郎著「日本精神と世界精神」天野貞祐著「学生に与ふる書」室伏高信著「日本予言」
中村星湖	小説家	古い所では「古事記」「万葉集」「論語」(共に文庫本で易く手に入ります)新しい所では「小鳥の春」「キュリー夫人伝」ヒトラーの「我が闘争」などよからうと思ひます。
高田義一郎	医学博士	なるべく事実を有りのまゝに記した物を読むべく人とりどりの批判を書いたものを遠ざけるがいゝ。 事実は誰が観ても一つであるが批判は人によつて違ふし、その正否を識別するのは、学徒には困難でもあり無理が生ずるからである。

人 名	役 職	コメント
冠松次郎	随筆家	先づ心の糧になる様な物を読むべきである。小説でもよい、何か考へさせる一よいにしる悪いにしるさういふ本がよいと思ふ。餘り固苦しい本を我慢して読むこともどうかと思ふ。興味本位の読んでも読まなくともよい毒にもならない本を読む位ならば横になつて寝た方が遙かにましだ。学校で勉強するとか研究するとかいふ場合には別問題で、たゞ余暇に読書をするといふ見地から述べたのである。
菅圓吉	立教大学教授	一、学校の教科書は精読すること。二、其の他は暇があれば各自の趣味に従つて、自分の好きなものをどしどし多読と思はれる程読む事がいい。
平田禿木	英文学者	世界を挙げての此の動乱の昨今に於て私は切に古典の味読をすゝめます。古典の中でも盟友伊太利のダンテの「神曲」を薦めます。中山昌樹、生田長江両氏の立派な邦訳もありますし、英語を読む人なら英対訳を手にして伊太利語を勉強しながら原曲の豊かな音律を味はつて行くのもよいと思ひます。
吉田賢抗	第二高等学校教授	人格の錬成、真の人としての大成に資する意味に於て、得道者や偉人哲士の修練苦悶の精神的な課程を描いた本を勧めます。大学各教科の様な各種技芸に関する本は単に自然科学の学科だけでなく、法学語学等の學問も亦一種の芸に重きを置いたもので普遍的に人として読まねばならぬものでなく、夫々専門の学芸として意義を持ちます。従つて人物論解に資する本とは、普遍的道義に立脚せる宗教哲学等の思想書や民族発展の精神的意義を持つ本でありませう。然し之等は解し難い欠点があるので、結局前述の様な本を読んで賢人哲士の思索苦悩の生活に己を投影し、自己反省に努めたら得る所が多いと思ひます。
福本喜繁	仙台高等工業学校教授 理学博士	私は読むべきもの、第一に学校の教科書をあげたい。その理由は述べる迄もない。然し、教科書は一般に無味乾燥である。構外に有志と面白く輪読した英書が教科書に採用されると、興味がなくなつた事を憶えてゐる。この様な事は小生だけの経験ではないやうである。課外の書としては私は古代の文学書をすゝめたい。科学的の書は新しいものを見る事も必要であらうが、本屋の小僧と競つて新刊書の名を覚える必要はない。
堀内敬三	作曲家 音楽評論家	専門の學問以外に思想、歴史、芸術、科学に就いての見識を持つて貰ひたいと思ひます、その根本として第一に哲学書を薦めます。それから日本の古典、支那、西洋の古典文学に親しんで下さい。総合雑誌、科学雑誌、芸術雑誌も読む事を御薦めします。
寺尾宏二	昭和高等商業学校教授	一般的に云へば、單に古典を、と答へる。古典の中にこそ現代に垂示する多くのものを見出し得るからである。
中澤辨次郎	農村問題研究家	一、先づ第一に我が国体の真髓を把握するに必要なもの。例示すれば有給二千六百年否神代史以降の日本歴史に関するものを諸般の史的角より述べてある書物に親む事 一、次には廣く近代科学の精髓に触れること、然し、当に自然科学の領域にのみ踏み止まることをせず、人文科学の上にも特にその中の経済科学、社会科学等の上にも眼を放つ事を忘れぬこと。
木下半治	文化学院教授 政治評論家	第一に優れた人物の伝記を読むこと。第二に歴史及び思想史に関するハッキリした文献を読むこと。第三に明確なる方法論を把握せしめる書物を読むこと。
渡部佐次馬	人物評論家	何を措いても計画的に古典の読破をやつて貰ひたいです。一週間一冊、或は一ヶ月一冊主義でもいい。古典の選択に就いては然し他に譲り私は国内新刊物については是非獎めたいと思ふ書物を少しく挙げておきます。阿部真之助著「人間と社会」津久井龍雄著「時局の周辺」岸田國士著「現代風俗」穴戸儀一著「芸術と生活」杉山平助著「日本人」米川正夫訳「北極飛行」。
吉岡修一郎	哲学者	多くの人は案外無意識のうちに娯楽的な態度で読書してゐます。本当は、読書といふものは真面目な生活を組織して行く努力の一部面になるべきものです。此の意味で私は、矢張り今の若い学徒に一番欠けてゐるものは科学方面の読書だと思ひます。今まで若い人達が通俗科学書など読んでゐてもそれは大抵従来の学校教育と同様な知識の注入を主とするものだったので、餘り効果がありませんでした。自分で苦勞して理解し、また科学研究精神と方法と歴史とを体得する様な書物を読むべきだと思ひます。
清野暢一郎	府立高等学校教授	日本精神の真髓を知るために「葉隠集」「万葉集」を読むのも悪くはないが、学生の分としては専ら教科書を忠実に勉強して将来の爲に基礎的知識を充分に備へ置くべきであらう。雑誌を乱読して浅薄な知識を振り廻す如きは学生として最も慎まねばならぬ。
内田宗義	長岡高等工業学校教授	「寺田寅彦全集」だけは是非全部を読んで貰ひたいと思ふ。これは明治・大正期に於ける「夏目漱石全集」に相当する地位にあるもの、少くともあるべきものと信ずる。「岩波新書」は撰んで読んでいたゞきたい。更に出来れば人間をその生涯の形に於て知る意味で伝記を読む事。又日本より文化の低い国を理解し得る書、例へば「アラビアのローレンス」等。いづれにしても落着いて端座して読んでいたゞきたい。

人 名	役 職	コメント
亀井貫一郎	衆議院議員	歴史。
江部鴨村	日本大学文学部講師	(一)明治天皇御製集(二)エビクテタスの教訓(三)新進鍛錬之書(山邊習学著)
岡田道一	医学博士	道は近きにあらず。何でも不思議と思ふものは假令つまらぬ様な事でも鮮明に研究する事が必要。殊に科学に於てまづ手近な衣食住の事を研究する書物を読んで決して損はない。例へば、我田引水の様だが煙草は果して毒か薬か、少しでものんで頭に悪いと思つたら中毒者の言に迷はずニコチンといふ薬物の事を調べて御覧なさい。その態度が望ましい。
兒山敬一	哲学者	いまの時代では、むしろ、学生、生徒はどういふものを読んではいけなかつたかといふ問題を感じます。実にたくさん、書物があるけれども、方針なしに読むくらゐ無駄な事はない。自分の立場から見て、読むべきものと、読む必要のないものとの区別を直観する事が第一です。その直観の力を持てば問題は解決しませう。然し読ませる事を目的とした本、話の糧になる本を、読んではいけなかつた。世間の評判を気にするな。之は言ふ迄もない事です。
山口誓子	俳人	学徒は、何によらず「古典」を読むべきだと思ひます。生なものゝを急いで読む必要はありません。しかし、多くの場合「古典」の読み方が、教科書風な読み方から脱し得るのは、学徒の生活を終へてからであるのは皮肉です。
加藤玄智	國學院大学教授	一、我が国国体明徴に資する書物 二、廣く知識を世界に求むる為に読む書物 三、心身の慰安になる様な而も健全な書物
丸山幹治	東京日日新聞論説委員	平凡な言ひ草ですが何よりもまづあらゆる種類の古典です。分つても分らなくてもいい。たゞ小生意気に批判的にならず、に、偉大なものに対する崇敬の念を常に忘れずに読むこと。あまりに時局的な読物は無益です。
菊田貞雄	明治学院教授	私は嘗て亜米利加に居りました時分に諸大学でも凡ての学生に(外国の留学生なども)亜米利加語と亜米利加憲法史を要求してゐました。どんな学生でもこの二科目を修了しない者は卒業出来ないものです。更に日本歴史を組織的に研究してゐる者などもありました。私は亜米利加に渡つて始めて日本を觀るやうになりました。日本語と日本史とは是非共われわれは自分のものにして置きたいと思ひます。外国のことなどを知らうとする時にも我々は彼等の國語や歴史(廣い意味で)を知らねばならぬと思ふやうになりました。
北尾淳一郎	東京高等農業学校教授	専門書は勿論のこと、それ以外にも、廣くして深い人間的な教養に資するやうな書物を読むことが切望せられる。知識を専門に限る事は、その人を専門の機械に造詣落せしめる所の可能性を多分に含んで居る。現代日本の知識階級が有する多くの本質的欠陥は此所からその原因を発する。眞の専門家は、専門のことに通暎する以上に、一般的な廣い見透しと、深い理解とが必要である。かくしてこそ優秀な指導者であり、眞の人間であり得る。
遠藤隆吉	果鴨高等商業学校校長	英雄豪傑傑人君子に交るべし。乃ち、東西の古典を読むは其の第一なり。
佐久間政一	第二高等学校教授	現代の如き動揺極まりなき時代に於ては、学徒はまづ何事にも動ぜざる磐石の如き不退転心を養ふを要す。この意味に於て、私はエビクテタスの「教説」及「提要」を推挙す。我邦のものにては、日蓮上人の御遺文の如きみな大いに読まれざるべからざるものと思惟す。各自の専門に於ける古今の名著は必ず渉獵すべきものなることを云ふ俟たざるべし。
大江專一	翻訳家	一、阿部次郎著「世界文化と日本文化」岩波書店版 一、神保光太郎訳「ゲーテ對話の書」改造社版
須藤廉吉	東京高等商船学校教授	世界的名著を出来るだけ読んで置くことである。時の審判を経て不朽の文字たることを立証されたものには偉大なる精神があり哲学があり倫理がある。青年時代にかうした書物に触れておかなければ一生涯それを手にする機会はない。時の流に浮ぶ「うたかた」に過ぎない書物などを乱読する必要はなし。遠き古への希臘の詩人や哲学者の言葉、ダンテ、シェクスピア、ミルトン、ゲーテ、シラー、モンテニエ、ユーゴー、セルヴァンテス、或ひはセントオーガスティン等原語で読めればそれに越した事はないが、邦訳でも結構である。日本の代表的な古典は勿論のことである。
布利秋	宗教家	既に赤色本を漁る時世ではない。と云つて修養づくめの読書三昧では社会や人生の表裏に接することは不可能である。とかくこの時世においては形式に流れて根底のない書籍を見ることが無難第一ではあるが、それのみでは思想的な動脈硬化に陥るし、てらひ氣多い知識に流れ易いし、結果がビールの泡になるだけで根底をつかむことが出来ず。と云つて答へは困難。

人 名	役 職	コメント
蒲池正紀	徳島高等工業学校教授	今最も大切なことは、やはり第一に歴史—日本史を読むべきでせう。それも中学時代の教科書のやうに、時代及び事実を個個ばらばらに暗記するのでなく、歴史の流れといふもの、思想といふものを掴むやうに読むべきでせう。さきごと評判だつた大川博士の二千六百年史など、一部に難点がないではないが、やはり教へられる処が多い。それから世界文化史をよむこと。このごろ赤本健介といふわりに若い人の「世界史入門」といふのをみてゐますが、歴史学に素人らしいところが却つて好ましく、いい本のやうに思ひます。一体に現在の高専での学科(殊に専門学校でのそれ)は非常にきりはなされて、相互の関連のないものが多く、それをまとめねばならない。そのためにも科学史と技術史を(後者は理工科系の学生に特に)すゝめたい。日本の技術は西洋科学史何千年の苦心の「結実」だけを取り入れてゐるため、土台の歴史的思想的な背景が無く、技術に対する畏敬がない。そのためにも科学史をひろく読んでほしいと思ひます。
杉浦保吉	水産講習所所長	一、「日本外史」を熟読玩味すること 一、世界情勢に関するもの
後藤勇	政治評論家	わが国のあたへられた政治的地理的条件からして、国家の運命は世界的なものであるが、鎖国政策の余弊と言はざるまでも蒙昧なる非合理主義に影響されて世界に対する知識が貧弱な現状にある。学徒たるもの知識を世界に求める前提として先づ世界を知る、その為の書物は乱読もまた可なるべしと思惟致します。

本研究は、日本学術振興会特別研究員 (DC2)、科学研究費補助金 (特別研究員奨励賞) の支援を受けている。

(なかの・あやこ／早稲田大学大学院)